



意思決定支援のアセスメント ～意思決定のプロセスを体験する～

2015年11月11日

八幡浜医師会館 於

松山ベテル病院 ベテル相談室 MSW 太田多佳子

本日のワークの目的

- 私達は、日々医療・看護・介護サービスの提供を行う中で、患者さんご家族の意思決定場面に遭遇している。意思決定プロセスにはそれぞれに根拠があり、対人援助を行う場合、プロセスの根拠を抜きにして支援をすることはできない。
- ①支援者が、意思決定プロセスを自ら体験し、実感することにより、対象者への意思決定プロセスに対する理解を深める。
- ②意思決定支援を行う際のアセスメント項目についての視野を広げ、実践現場に活用できる質問項目について考えていくことができる。

二人一組になって

- Aチーム 今から2人で二つのスイーツを選ぶという場面に遭遇します。
(意思決定場面)
- 2人で協議して、どちらか一つを選ばなければなりません。
- まずは、心の中で、自分の選びたいものを決めて下さい。
(相手には言わないでください)

今の状態をアセスメント

- 自分の面接者に、今のあなたの状態を教えてください。面接者はアセスメントシートを用いて、質問をしていきます。
- 1～15までです。（10分程度で）

スイーツの選択

- 15までの質問を終えたら、Aチームの2人でスイーツの選択を行ってください。
- 面接者は、観察してください。
- 選択を終えたら、16にすすみ感想を共有してください。
- 面接者は、グループ内でクライアントのアセスメント状況を簡単に報告し、17に進んでください。（トータルで10分程度）
- Bチームと交代してください

アセスメントの意図を振り返る

- 安全管理・危険回避・リスクマネジメント
- 情報量や理解度で、選択肢は変わる
- 過去・現在・未来の時間軸から考える
- その人にしかない人生の物語を教わる
- 過去の経験・価値観・思考プロセス・今の状態（コンディション）などが、未来に影響を与える
- クライエントの対処方法・スキル・ストレングスなどを教わることで、未来への対処方法を予測できる
- あらかじめ決めていたことでも、生ライブ上で変化することがある
- 変化の可能性も想定内にしておく

アセスメント時の配慮

- 尋問とならないようにこころがける
- 教わる姿勢で
- クライエントの提案が、どこから引き出されたものなのかについて思考する
- クライエントの本来持っている内的力を引き出せるように関わる
(決められる力をそもそもクライエントは持っている)

清水哲朗 教授

- 医療現場における意思決定のプロセス
——生死に関わる方針選択をめぐって

- 東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター
- 上廣(うえひろ)講座 特任教授
- ホームページURL : <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~shimizu/index.html>
- 主宰する臨床倫理プロジェクト
- <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/dls/cleth/index-j.html>

渡部 律子 教授

- 1976年関西学院大学社会学部卒業。1978年同大学大学院修士課程修了。1982年米国ミシガン大学大学院に留学。1983年社会福祉学修士(M.S.W.)。1988年心理学修士。1990年哲学博士(Ph.D.専攻:社会福祉学心理学)。この間,日米両国で臨床実践。ニューヨーク州立大学バッファロー校,シカゴ大学社会福祉系大学院で教鞭をとる。ソーシャルワーク援助理論 技法,調査法 研究法,老年学を教えるとともに,老年学専攻の修士学生の実習指導および論文指導を行う。
- 1995年関西学院大学総合政策学部助教授。1999年,関西学院大学総合政策学部教授。
- 専門は,高齢者福祉,家庭福祉,ソーシャルワーク援助技術論,ストレスコーピングとソーシャルサポート理論,対人援助職者の教育 スーパービジョン 職務満足,ケアマネジメントなど。